



いさぎのいい? 国語辞典の話 その1

最近では電子辞書を使う人がほとんどで、紙の辞書を使う人が減っている。重い辞書を何冊も持つよりも、一台電子辞書を持っていれば済むわけだし、気になった時にサッと引けるというのも大きな利点だろう。学習支援の付録がついていたり、音声や画像といったマルチメディア機能も充実してきたことを考えると、まあ仕方ない気もするのだが、それでもやはり「一覧性」という点では、紙の辞書に圧倒的なアドバンテージがある。人間は五感を使って学習しており、目からの情報はかなり重要だから、ある語を引いた時に、その語の説明にどれくらいのスペースが使われているのかといったことをサッと視覚的に把握することも、その語を記憶していく時の大きな力になっているような気がするのだがどうだろうか。

さて、辞書の編集に関する本(『辞書を編む』飯間浩明、光文社新書)を読んだので、その中から面白かった話題を紹介しよう。

＊

かつてNHKの番組で、「ひなはついに親の後を追って巣を飛び出しました。実にいさぎのいい巣立ちです。」というナレーションがあったそうだが、この「いさぎのいい」という言い方、君たちは使う?

もちろんこれは「潔い(いさぎよい)」の変形になるわけだが、上の言い方から、この語が「いさぎ+よい」と分析されていて、それが「いさぎ+いい」、「いさぎ+が+いい」という言い方に变化したのだろうと想像がつく。こうなると、この言い方もよさそうなの

だが、実は「潔い」は「いさ+清い」なのだそう(「いさ」は「勇」の語幹で、積極的な・際だったの意)。つまり、実際に使われはじめているとはいえ、語源から考えると「いさぎのいい」は正しい言い方とはいえないことになる。

ちなみに、この言い方にはバリエーションがあって、「いさぎなさ」「いさぎない」という言い方も採取されるそう。『辞書を編む』の著者は、「私はこれを誤用として批判するつもりはありません。むしろ、日本語の変化の結果として、当然ありうることばだと考えます。」と評している。私は、割と語の変化については許容派だと思っているが、この言い方については微妙である。

＊

辞書の語釈に関する有名な話としては、「右」の定義がある。さて、諸君は「右」をどう定義する?

広辞苑では、「(ニギリ(握り)の転か。①南を向いた時、西にあたる方。」と定義されている。なかなかうまい定義のように見えるのだが、試しに「南」を引いてみると、「日の出る方に向かって右の方向」となっていて、説明が循環しているのだそう。へえ～。

新明解では、「①アナログ時計の文字盤に向かった時、一時から五時までの表示のある側。[「明」という漢字の「月」が書かれている側と一致]」。『辞書を編む』の著者が編んだ辞書(三省堂国語辞典)では、「①この本を開いたとき、偶数ページのあるほう(がわ)。」としたそう。へえ～へえ～～～(続く)